

## 今こそ獣医師の団結を

河又 淳<sup>†</sup> (千葉小動物クリニック・福島県獣医師会会員)

私が獣医師になって早くも四半世紀が経つ。ある意味、小動物臨床の世界において、大きな変貌を遂げた激動の時期ではなかっただろうか。当時は、学会や書籍どころか、臨床に関する情報なども今と比較して極めて少なく、勉強するにも苦慮する日々であった。地元獣医師会は年配の先生方が取り仕切り、若輩の私にとっては敷居が高く、小動物開業者の存在感は現在より希薄であったと記憶している。当時、勤務していた病院の古びた本棚には、「CURRENT VETERINARY THERAPY (V)」と Miller 博士の「犬の解剖学」のみが、唯一の神頼みの本としてあった。読書嫌いの私であったが、さすがに切羽詰っていたこともあり、とにかくボロボロになって字がかすれるまで読んだものである。他は、小動物臨床にはあまり役立たない大学の教科書しかなかったが、学生時代に基礎系があまり得意ではなかった私にとって、暇な時は格好なる復習の時間であった。斯くして私の獣医師人生はスタートした。

私が勤務していた病院は、6年間の学生時代、休暇期間のほとんどをそこで研修していたこともあり、前向きに考えれば、現場から自らが学べという空気が漂う病院であった。当然のことながら、責任も自分に課せられた。記憶に鮮明なのは、4月1日に勤務が始まるや否や、その2日後には子宮蓄膿症の手術を全て任されたことであった。今考えると、究極の教育であったのかもしれない。日々出会う症例や、飼い主からの様々な情報が、何よりの教科書であった。自分自身が未熟者であったこともあり、症例から何かをつかまねばと貪欲な毎日であり、自分のスキルをどうやって上げようかと考え悶々とする日々であった。各種会合でお会いする獣医師の先輩方は、皆近づき難く偉い存在に思えた。獣医師会においても同様で、封建的な空気は多少あったが、秩序と静寂さは保たれていた。小動物臨床に携わる先輩獣医師方は、群れることなく、各々単独で努力しておられたが、倫理観や団結力はあったと記憶している。年齢を経たためか、今になって思えば、とてもハングリーで、現場での苦労は多かったものの、とても懐かしく良き時代だったように思える。

一瞬のごとく25年が過ぎ去り、この世界も一変した。現場においては、そのレベルアップは目覚ましいものがあり、以前では考えられない診断・治療とそれに関わる技

術が進歩した。当然のことながら、救われる動物達も大幅に増えたことは周知の事実である。今や、専門医やCT、MRI、PET-CTなど高度医療機器の登場により人の医療と大差ない状況となった。以前では想像もできないほど便利な器具器材なども容易に手に入るようになる一方、書籍どころかインターネットの普及に伴い、溢れんばかりの様々な情報が飛び交い、それこそ内容は別として、ワンクリックで山ほどの情報がいとも簡単に入手可能となった。学会やセミナーも毎週のように開催され、出席したい学会やセミナーが同日に重複していることも珍しくなく時代となった。当然、病院のスタイルも大幅に変貌を遂げ、勤務獣医師や動物看護師が不可欠な存在となり、院内でのチームワーク診療や、近郊や遠隔の病院とネットワークで診療にあたるケースも散見されるようになり、さらには企業病院なるものが登場した。しかしながら、その反面では医療事故やインフォームドコンセントの不足などによるトラブルも多発してきており、その内容はともあれ、調停や訴訟の件数も相当数にのぼるようになった。

この25年での進歩は、単に学問の進歩のみならず、多くの動物達を救うことによって、多くの人々を救ってきたことは紛れもない事実である。これも大学教育の質が向上したことや、多くの学会や各種セミナー等の情報源が増えた賜物であろう。恐らく、今後はさらにレベルアップしていくものと思われる。しかしながら、それらとは逆行し、最近では獣医師の倫理が問われる様々な問題や、獣医師会や関係組織で会員相互の結束が弱体化しているとの意見をよく耳にする。今の社会情勢も相俟っているのかもしれないが、個人的には、獣医師会のみならず獣医師間の人としての繋がりも希薄になってきている

## 河又 淳

## —略歴—

- 1985年 北里大学修士課程終了  
福島県郡山市の小動物病院に勤務
- 1998年 福島県福島市の千葉小動物クリニックに勤務  
現在に至る。



<sup>†</sup> 連絡責任者：河又 淳 (千葉小動物クリニック)

気がしてならない。これだけ知識も技術も進歩した状況なのに何故なのだろう。確かに一部にはゼネレーションギャップも存在するが、以前のような獣医師の規律や倫理観に、様々な角度から乱れが生じてきているのではないだろうか。知識や技術は、獣医療においては主軸を成すものであるが、そのみが先行したり、時として獣医師としての規律や、倫理観を見失ってしまうと、最も大事な人の心を察することを忘れてしまうのではないだろうか。それがひいては、獣医師としての団結心や協調性の低下を惹起する一因となっているのかもしれない。

福島県の会津地方は、戊辰戦争期における会津藩の少年正規軍であった白虎隊の魂が今でも息衝く街である。

藩には、幼年者に対する礼儀や道徳を7つの教えとして示した「什（藩士の子弟を教育する組織）の掟」があり、最後に「ならぬものはならぬ」と記し、これらの教えを厳守させている。このような教育により、立派な武士としての自覚と責任、さらには団結心を持たせ、会津全土の幸福と平和を求めたのである。今時、説教じみて反感を買うかもしれないが、「ならぬことはならぬ」の精神をもつことにより、獣医師の規律や倫理が守られ、獣医界、動物達ひいてはそれらを取り巻く多くの人々に幸福と平和をもたらすのではないだろうか。そして、今こそ、この精神のもと、獣医師の団結心と協調性が向上することを期待したい。